

科目名	生命倫理特殊研究	担当者	ハシモト 橋本 カズノリ 和法	期間	通年	単位数	4
-----	----------	-----	-----------------------	----	----	-----	---

【科目概要】

目的	<p>生命倫理について、氾濫する情報に惑わされず、科学的に検証されたデータを基に、現状で最も新しく、かつ信頼性の高い知見を得るためには、どのような文献を基に、どのように考えれば良いか、という方法論を身に付ける。教材、参考図書を提示してあるが、必要な文献は自分自身で検索することも学ぶ。</p> <p>課題としては癌患者などの終末期医療における緩和医療、脳死、尊厳死における現状と倫理的な問題についてと生殖補助医療におけるその医療技術の現状と社会倫理的な問題について考察を行う。</p>		
到達目標	<p>生命倫理に関連する課題を取り上げ、その問題点を整理し、最新の知見を基に、その課題に取り組む方向性を見い出す方法論を身に付ける。</p>		
学修方法	<p>レポート課題に沿って、テキストや参考図書を基に、自分自身で生命倫理の分野において問題となっていると考えられる題材を取り上げ、その題材に関する必要な文献の検索を行い、それに対する考え方をレポートとしてまとめる。</p>		
スケジュール	<p>前期：教材1のレポート課題(1)の草稿は7月末、課題(2)は8月末を目処に提出する。取り上げる題材については、草稿としてまとめる前に、メール等で相談することが望ましい。いずれの課題も9月中旬までに最終稿を提出する。</p> <p>後期：教材2のレポート課題(1)の草稿は11月中旬、課題(2)は12月中旬を目処に提出する。取り上げる題材については、草稿としてまとめる前に、メール等で相談することが望ましい。いずれの課題も2018年1月上旬までに最終稿を提出する。</p>		
成績評価	種別	割合	評価基準
	レポート内容	75%	レポートの内容に関し、取り上げた題材の適切性、考え方の科学性・妥当性、最新の知見の反映、自分自身の専門分野との関連性等を評価する。
	レポート構成	25%	レポートの構成や表現に関し、全体の記載方法、図・表の活用方法、引用文献の記載方法等を評価する。
履修者への要望	<p>1) レポートを作成する前に、取り上げる題材やレポートの構成(目次案等)について、メール等で連絡相談して下さい。</p> <p>2) 題材の選択は自由ですが、発想が面白い、ユニークな題材を歓迎します。</p> <p>3) レポートの構成については、取り上げた題材の簡潔なレビューと同時に、何か一点、最新の知見を反映した上で、自分自身の考察を加えることを基本とします。</p> <p>4) レポートは、簡潔明瞭にまとめることを心掛けて下さい。</p> <p>5) 教材・参考図書を全て読み込む必要はありません。むしろ題材に関連した文献は自分で検索して下さい。</p> <p>6) 引用文献については、各々の研究分野の形式に従って、適切に記載して下さい。</p> <p>注1：後期の課題については、これまで生物学・生命科学を履修していない場合は、内容が難しいと思われるため、スクーリングを受講すると同時に、不明の点はメール等で問い合わせして下さい。</p> <p>注2：本レポートは開示しませんが、個人情報に関わる事項を記載する必要はありません。または適当にフィクション化しても結構です。</p>		

【レポート課題】

基本教材 1	
教材の概要	著者名： 保坂正康著 教材名： 『安楽死と尊厳死：医療の中の生と死』（講談社，1993年） ISBN:978-4-0614-9141-0 740円+税
	人は死を選択する権利をもちうるのか，終末期医療と「尊厳ある死」の中で死に対する受容を考える。
参考図書	1) 終末期医療の決定プロセスに関するガイドライン～よりよい終末期を迎えるために～ <a href="http://www.ajha.or.jp/topics/info/pdf/2009/09618.pdf">www.ajha.or.jp/topics/info/pdf/2009/09618.pdf</a> 2) 終末期医療に関する意識調査会等検討会報告書—厚生省 <a href="http://www.mhlw.go.jp/bunya/iryuu/zaitaku//dl/h260425-01.pdf">www.mhlw.go.jp/bunya/iryuu/zaitaku//dl/h260425-01.pdf</a>
履修上のポイント	癌患者の終末期医療については、「延命こそ最も重要」という考えから，人生の最後にある人の心や体の痛みを和らげる「緩和医療」へと変化しつつある。「いつをもって終末期と考えるか」や「治療方針」については，本人の意思，家族の意見，医療従事者の考えなどの様々な決定要因が関与する。またリビングウィル，安楽死などの生命の尊厳に関する倫理的な問題が論じられてきた。
レポート課題 1	癌患者の終末期医療について延命に重点を置いた積極的治療と緩和医療の本邦における現状とその問題点について，医療や行政の観点から論じる。
レポート課題 2	本邦におけるガイドラインや意識調査の結果を踏まえ，終末期医療のありかたについて自らの考察を行う。

基本教材 2	
教材の概要	著者名： 坂井律子著 教材名： 『いのちを選ぶ社会 出生前診断のいま』（NHK出版，2013年） ISBN:978-4-1408-1662-6 1,500円+税
	2013年から「無侵襲的出生前遺伝子診断:NIPT」の臨床研究が始まり，これまでの羊水検査が行われてきた時代と比べ出生前診断を希望する夫婦が増加すると考えられる。その際に生ずる生命の選択に関する倫理的問題について論じている。
参考図書	ヒト胚の作成・利用に係る指針の規定の現状について <a href="http://www8.cao.go.jp/cstp/tyousakai/life/haihu80/siryu3-2.pdf">www8.cao.go.jp/cstp/tyousakai/life/haihu80/siryu3-2.pdf</a>
履修上のポイント	生殖補助医療技術の発達に伴い，最近倫理的な問題が様々な面からクローズアップされてきている。生殖医療は世代の継承に関与しており，その治療結果が個体にとどまらず子孫に影響されていく特殊性を有する。生殖に関わる倫理には，生まれてくる子の同意を得ることができないことから，施術においては自己決定権だけでは行使できない状況もありうる。こうした状況の中では人権，社会的倫理，法的な観点から生殖医療行為について論ずる必要性があると考えられる。
レポート課題 1	新たな技術としての，着床前診断，配偶子提供，代理懐胎，ES細胞，iPS細胞からの配偶子作成のいずれかを取り上げ，対象とする疾患とその診断・治療方法の原理，を論ずること。最近の生命科学技術の進展に関連する，自分自身の担当業務，または日常生活上での出来事に関する事項でも可。
レポート課題 2	課題 1 の診断・治療等を実施する際に生ずる倫理的問題を取り上げ，その技術的限界を踏まえた上で，これらの胎児選別，親子・家族という社会の枠組みを改変させるかもしれない問題，いかに社会のコンセンサスを得るかななどを論ずること。または課題 1 で取り上げた題材における，社会的な問題でも可。